

dialogues

1997-2013

美術をめぐる ダイアログ

宇都宮美術館 作品解説倶楽部
鑑賞ガイド & 活動の記録 1997-2013



目次

語りかける展示室への誘い 『美術をめぐるダイアログ』の発行によせて	2
鑑賞ガイドⅠ わたしたちのとおきの質問10選	3
鑑賞ガイドⅡ 厳選・宇都宮美術館コレクション これだけは見てほしい!	14
活動の記録	
学校ガイド	22
これまでのあゆみ	23
作品解説ボランティアの立上げの頃	27
作品解説倶楽部の研修	29

語りかける展示室への誘い

宇都宮美術館 主任学芸員
伊藤伸子

宇都宮美術館の展示室で活躍する作品解説倶楽部のメンバーは、平成25年3月現在、23名です。解説歴13年のベテラン1期生から、生まれたての3期生まで、男女比こそ偏りがありますが、年齢も職業もさまざまです。解説スタイルもバラエティに富んでおり、たとえ毎日通い詰めたとしても、日々違った視点で楽しむことができるでしょう。

宇都宮美術館が所蔵するおよそ6400点の作品は年3回の「コレクション展」で順次展示されますが、毎回、解説倶楽部のメンバーは学芸員から研修を受け、図録などの資料を読み込んで、来館者の前に立ちます。学芸員のトークはおおむね大人数を前にしての一方通行の講義式になりがちですが、ふだんの展示室にはさまざまな状況があり、多種多様な来館者があります。そうした来館者のニーズに応じて、解説倶楽部のメンバーは作品との「出会い方、出会わせ方」に工夫を凝らします。そして経験を積むほど、その引き出しは増えていきます。

この『美術をめぐるダイアログ』の前半には、作品解説倶楽部がこれまでの活動の中で培ってきた「作品と鑑賞者をつなぐための言葉」を収録しました。「とおきの質問」と「厳選・これだけは見てほしい!」の2部構成で、作品との対話が自然に始まるよう工夫しています。そして後半では、作品解説倶楽部のメンバーが誕生するまでの道のりを紹介しています。これから美術館などでの作品解説活動してみたいと考えている方は、どうぞ目を通してください。『美術をめぐるダイアログ』があなたの心の中の小さな火に強く息を吹き込むことを願っています。

『美術をめぐるダイアログ』の発行によせて

宇都宮美術館 作品解説倶楽部
記録集編集委員

作品解説倶楽部が「振興会教育部 作品解説ボランティア」として産声を上げたのは、1999年の桜舞う春のことでした。時が経つのはあっという間でしたが、様々な出来事が降り積もった濃密な年月だったと思います。2003年に2期生メンバー、2012年にはフレッシュな3期生メンバーも加わり、活動の場と幅が広がってきました。

しかしコレクション展でのギャラリートークは、今も変わらずに、参加者の方々と共に美術を鑑賞する喜びをわたしたちに感じさせてくれます。ギャラリートークでは、わたしたちの言葉をきっかけに、参加された方々がそれまで見えていなかったものを、自ら探り当てていくことがあります。そんなとき静かな空間がパッと華やいで、お互いが相手の言葉に真摯に耳を傾ける、心地よい場になります。人との出会い、作品との新しい出会い。寡黙な展示室は、様々な出会いが生まれる磁場を持った劇的な空間に変化するのです。そしてこの出会いの場で、わたしたちを育てて下さったお客様に、心から感謝しております。

さて、この記録集『美術をめぐるダイアログ』を発行する今春を機に、今一度初心に立ち返りたいとわたしたちは考えています。個人の経験にとどまることなく、互いの知識や経験を学びあい、解説に対する共通認識を確認しあうことで、より豊かな明日の解説につなげたいと思っています。そして、美術を楽しむ喜びを、この記録集を手取るあなたと分かち合えたら、と…。

わたしたちは今日も展示室で、あなたをお待ちしております。

わたしたちの とっておきの質問10選



ある一言を投げかけられると、作品がちがって見えてくることがあります。わたしたち作品解説倶楽部のメンバーは、一人一人が、作品の魅力を引き出す質問を持っています。ここでは長年のギャラリートークのなかで編み出してきた質問を、宇都宮美術館コレクションと一緒に紹介します。ぜひ展示室でこの問いを考えてみてください。そして美術館と一緒に来た人たちに問いかけてください。さりと作品について、より深く考えることができるはず。

Q2

ワシリー・カンディンスキー《三つの星》

— 何に見えますか？

わたしたちがギャラリートークでこの質問をすると、「顕微鏡の中の世界」という答えが返ってきます。あるいはミクロの世界を連想すると同時に、宇宙的なものを感じるというお客さんも。カンディンスキーは、「青は、典型的に天上の色彩である」と言いましたが、曲線で構成されたこの生き物たちは、わたしたちの目には見えない世界にたどよう微生物なのかもしれません。ところで、この絵の主役はなんでしょうか。「三つの星」という題名は、冗談めかしているようでもあり、また、意味深長なようでもあります。



ワシリー・カンディンスキー《三つの星》1942年 油彩・カードボード 48.2×34.7cm

guest voice

- ・ミジンコかな
- ・タツノオトシゴ?
- ・左下の物体が、笑った人の顔みたい
- ・ミクロの世界とマクロの世界
- ・星っていうと空のイメージだけど、なんだかちがう

厳選・宇都宮美術館コレクション

これだけは見てほしい!

宇都宮美術館には、およそ6400点もの作品が収蔵されています。その中から、わたしたち作品解説倶楽部のメンバーが、「この作品に出会ってほしい!」「通り過ぎないで、ぜひ見てほしい!」と思う作品を紹介します。メンバー一人一人の声を集めて、西洋美術、日本美術、デザイン、彫刻、現代美術、宇都宮ゆかりの美術の6ジャンルについて、それぞれ3作品を選びました。展示室で何度も見ているおなじみの作品はもちろん、数えるほどしかコレクション展に出品されていない作品もあります。あなたのお気に入りの作品はどれでしょうか?ぜひ展示室で、出会ってください。

Japanese art

日本美術

コレクションの中でも主役といえる作品に多く票が集まりました。月夜が印象的な高橋由一《中州月夜の図》は、コレクション展に展示されていると足を止めて鑑賞する方が多い作品ですが、わたしたちはお客さんが注目しないところにも気づいてもらえるようなトークを心がけています。また宇都宮は版画制作が盛んだことから、「創作版画」の紹介にも力を入れています。作品解説倶楽部の中で熱狂的なファンがいるのが谷中安規です。谷中の、不思議でユーモアあふれる世界に魅了されるメンバーは、ギャラリートークでも熱い語り口調になっています。



高橋由一《中州月夜の図》
1878年 油彩・キャンバス
51.0×114.8cm

1
ギャラリートークでは、星も描かれていることを伝えるとよく見られます。また「他の絵にはないものがあります」という質問もすることがありますよ。(答え:額が二重になっている!)



松本竣介《街》
1940年 油彩・板 53.2×72.5cm

2
人物の白い輪郭線の手を見て、「本当はこうしたいっていう心の動きをあらわしている」と言った小学生が。鋭い見方だと思いました。



谷中安規《夢の国の駅》
1932年 木版・紙 12.1×15.8cm

3
お客さんは通り過ぎてしまう作品だけけど、大好きな作品!おとぎ話のような幻想的な雰囲気注目してください。

活動の記録

作品解説倶楽部の主な活動はコレクション展でのギャラリートークですが、その他にも活動を行っています。ここでは毎日のギャラリートーク以外の活動として、学校の団体向けに解説を行う「学校ガイド」を紹介します。また作品解説倶楽部の歴史「これまでのあゆみ」や、その最初期のエピソード、さらには2011年度から育成が始まった3期生たちの、募集・養成講座からデビューに至るまでの道のりを掲載します。あなたと一緒に美術を楽しめる日がくることを願って。

school guide

学校ガイド

宇都宮美術館では、幼稚園や小学校・中学校・高校といった学校団体に、ギャラリートークをする「学校ガイド」を、申し出に応じて行っており、これを作品解説倶楽部が担当しています。標準的な学校ガイドでは、児童生徒を10名前後のグループに分け、それぞれに作品解説倶楽部メンバーが1名つき、コレクション展を約50分かけて鑑賞します。対話によって子どもたちの思いや考えを引き出し、自由に美術作品を鑑賞する楽しさを伝えるギャラリートークです。

ある日の学校ガイドにて

(クレス・オルデンバーグ《中身に支えられたチューブ》を指さして)

「あのチューブから出ているのはなんだと思う？」

「はみがき？」

「絵の具かな？」

「じゃあ、どこから見るのが好き？」

(子どもたち、いろいろな場所から見てみる)

「ここ！」

「どうしてそこがいいって思ったの？」

「チューブが一番細く見えるところだからかなあ」

「わたしは、白いの切れてるってわかったところ。1本じゃないんだよ」

「!!! あの中に数字があるけど、おばちゃん見つけられる!？」

「どこ？」

(チューブから出た中身の部分を指さして)「6と8だよ！」

「すごいね。みんなよくそこまで気づいてくれたね」



参加者の感想

ボランティアの先生に、いいことをたくさん教えてもらいました。それは、みんな同じ絵を見ても、その絵を見る人によって、かんじかたがちがうってことです。(小5 女)

わたしたちのしつ問に対して、ひとつひとつ、とてもわかりやすく、とても勉強になりました。(小4 女)

ボランティアの方の説明を聞きながらのグループ見学は大変好評でした。説明を聞くことで鑑賞の仕方がこんなに豊かに広がるものかと、感激してしまいました。(小5担任)

絵を見ながら、ぼくの意見をきいて「それもあるね」「そうだね」などと教えてくれて、ぼくはうれしくなっても絵が好きになりました。(小5 男)

ボランティアのみなさんが、子どもたちの気持ちや感性を穏やかに受け入れ、認めてくださいました姿に本当に感動いたしました。(小3担任)

summary of 1997-2012

これまでのあゆみ

1997

- 3月 宇都宮美術館開館 宇都宮美術館振興会入会
- 4月 振興会教育部「作品解説ボランティア」養成講座スタート(42名)



養成講座のうち外部から講師を招いての美術講演会

1998

- 4月 養成講座修了式
23名に谷館長から修了証書が手渡されました。
- 5月 実地審査
館長や学芸員の審査のもと、展示室1でのギャラリートーク。
- 6月 ギャラリートーク実践研修開始

答えは一つだけじゃない、そのことをギャラリートークで伝えていきます。お客さんに自由に作品を見てもらうことを大切にしています。



1999 ●メンバー15名 ●研修2回

- 4月 宇都宮美術館作品解説ボランティア委嘱
1期生15名でスタート。

2000 ●メンバー15名 ●研修5回(うち企画展2回) ●団体ガイド1件

- 7月 「長谷川利行展」企画展作品解説
はじめての企画展解説。事前研修として、青木学芸員が同行し鎌倉にも行きました。
- 8月 特別研修会「見えない境界—変貌するアジアの美術」(谷館長)
- 2月 児童養護施設 下野三楽園6年生との交流会
2000年以降、5回開催されました。



鎌倉へ研修旅行

2001 ●メンバー15名 ●研修5回(うち企画展3回)

- 6月 地域情報誌「おーぼっく」に紹介記事
「作品の面白さ…私たちが解説します!」掲載
2期生の募集も告知されました。
- 7月 2期生、作品解説ボランティア養成講座スタート(42名)



2002 ●メンバー13名 ●研修8回(うち企画展4回) ●団体ガイド2件

- 8月 2期生、ギャラリートーク実践研修開始
- 9月 第1回部会
これより部会が定例化。月に一回開催に。
- 12月 常念寺訪問
谷館長と青木学芸員も同行し、島多訥郎の作品を鑑賞しました。



島多訥郎の作品の前で

2003 ●メンバー24名 ●研修6回(うち企画展2回) ●学校・団体ガイド5件

- 4月 2期生、ギャラリートーク開始(12名)
- 10月 学校ガイド(築瀬小1年生74名)
はじめての学校ガイドで、子どもたちを相手にどんなギャラリートークをしようかと、まだまだ手探り。
- 11月 対話型鑑賞教育講演会(上野行一氏、アメリア・アレナス氏)
- 2月 対話型作品鑑賞勉強会(伊藤・中田学芸員)

毎日のギャラリートークでは大人のお客さんが中心。学校ガイドでは小学生がほとんど。大人と子ども、どちらも相手しているとバランスがとれるような気がします。知識を持っていない子どもは作品を好きなように見てくれます。その自由な見方を大人のお客さんに伝えると、子どもに触発されることもしばしばありますよ。

2004 ●メンバー23名 ●研修6回(うち企画展3回) ●学校・団体ガイド6件

- 4月 ホームページ立ち上げ
- 10月 温泉旅館「大黒屋」で丑久保健一展の鑑賞
触察に関するレクチャー(名古屋市美術館角田美奈子学芸員)
- 11月 群馬県立近代美術館ボランティア40名との交流会
- 12月 特別研修会「山崎つる子さんの絵画の魅力」(北村学芸員)
触察ガイド(日本網膜色素変性症協会栃木県支部25名)
視覚に障がいのある方と美術館との出会いのサポート役に。



彫刻作品を触って鑑賞

2005 ●メンバー23名 ●研修7回(うち企画展2回) ●学校ガイド4件

- 7月 川村記念美術館にて「パウル・クレー展」見学
11月 学校ガイド(おもちゃのまち幼稚園60名)
2005年から毎年、学校ガイドをしている幼稚園です。



幼稚園児も活発に話し合います

2006 ●メンバー21名 ●研修6回(うち企画展1回) ●学校・団体ガイド9件

- 4月 作品解説ボランティア、振興会から独立
6月 世田谷美術館ボランティア28名との交流会

同じ興味を持つ仲間たちと、勉強したり、旅行をしたり。ひとつひとつを解説に結び付けていくことに、大きな喜びを感じます。

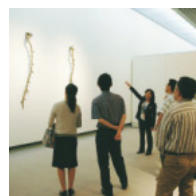
2007 ●メンバー21名 ●研修4回 ●学校ガイド2件

- 8月 宇小中教研図画工作・美術部会夏季講習会150名
宇都宮市の図工美術の先生たちが展示室に大集結。
対話型作品鑑賞法の実地研修のトーカー役を務めました。



2008 ●メンバー19名 ●研修8回(うち企画展4回) ●学校ガイド7件

- 4月 作品解説ボランティアから「作品解説倶楽部」に名称変更
5月 谷館長による連続講話(翌年6月まで)
5回の講演会(「中西夏之について」「河口龍夫について」「辰野登恵子・堀浩哉・孫雅由について」「中西夏之氏への手紙について」「若林審について」)
9月 長重之氏によるギャラリートーク(於 栃木県立美術館)
10月 横浜トリエンナーレ鑑賞(北村学芸員同行)
1月 特別研修会「アメリカの美術館事情」(小堀学芸員)



2009 ●メンバー16名 ●研修5回(うち企画展2回) ●学校・団体ガイド12件

- 9月 特別研修会「バウハウスについて」(石川学芸員)
11月 下野新聞に県内の美術館ボランティア紹介記事「とちぎイチ押し 広がる美術館ボランティア」掲載



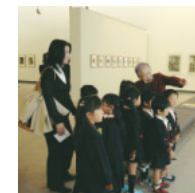
2010 ●メンバー16名 ●研修5回(うち企画展2回) ●学校ガイド6件

- 7月 部内用の活動資料&記録「あゆみ」編集開始

研修はもう十年以上も前になりますが、学芸員さんから「トーク中に言葉につまったら、作品から言葉をもろう」というアドバイスをいただきました。自分の感性で作品を見てそれを伝える、今でも大事にしていることです。

2011 ●メンバー16名 ●研修1回

- 5月 宇都宮美術館は10か月間の工事休館に入りました。
作品解説倶楽部規約の作成(翌年2月まで)
10月 群馬県立近代美術館ボランティア9名との交流会
3月 宇都宮美術館リニューアル・オープン



2012 ●メンバー23名 ●研修3回(うち地区市民センターへの協力のための研修1回) ●学校ガイド5件

- 10月 3期生ギャラリートーク開始



「どの作品を家に飾りたいですか?」ギャラリートークでどんなつまらなそうにしているお客さんでも、この質問をされると盛り上がります。作品を自分の身近なものだと感じると、面白く見えてくるのかもしれないですね。

beginning of volunteers

作品解説ボランティアの立上げの頃

宇都宮美術館 副館長
青木 理

早いもので宇都宮美術館の開館からすでに16年の歳月が流れた。現在は作品解説倶楽部として活動している作品解説ボランティアも、開館翌年の6月から始まったので、15年近くの歴史を持つ。その頃の思い出を書いてみたい。

宇都宮美術館が開館した平成9年3月に、作品解説ボランティア研修の募集が「広報うつのみや」に掲載され、42名の応募があった。それから1年間、月1回の講義形式の研修がスタートしたが、時間が水曜日の午前10時から正午までだったため、圧倒的に多いのが主婦の方々だった。講義に出席し、その度に出された課題に対してレポートを1本書き、1年12本のレポートのうち、8本以上提出すれば自動的に修了証書もらえるという条件だったが、これが意外と高いハードルだったらしく、最終的に翌年の修了式に出席したのは23名であった。その式場で「来月から実地研修が始まります」と通知すると、なんと数名の人から「今までの研修は、市民大学のように

無料で講義を受けられると思い受講したので、解説ボランティアになるつもりはない」と言われ、仰天してしまった。結局16名がボランティアになりたい意志を示したが、この人たちには、最初から大変な試練が待っていた。

忘れもしない平成10年5月19日と20日の2日間、実際に作品が展示されている展示室1で、館長や副館長、学芸課長の前に、全く練習なしで作品を解説するという「荒行」が行われたのである。美術館側としては、「どのくらい解説できるのか」「お客様の前でしゃべる度胸はあるのか」見てみたいという前向きな気持ちだったが、ボランティア候補生には大変なプレッシャーだったらしい。その後部長も経験したSさんから「あの日は車で美術館に向かう途中で事故にでも合えばいいと思った。そうすれば欠席することができる」という言葉を聞いて、その大変さを察することができた。この「荒行」は無事に終えたが、その結果、即戦力としてすぐにでも解説が可能な

グループと、研修が必要なグループに、活動を分けることになった。今思うと、これが失敗であった。即戦力と言われた人たちは翌月から実際にお客さんを前に解説を始めた一方で、研修が必要と言われた人たちが一斉に「もう辞める」と言い始めたのである。当時担当だった私は、一人一人を呼び、2ヶ月かけて「辞めないで続けてください」と説得した。結局全員続けることになったが、研修は半年かかり、全員15名のデビューは平成11年の4月であった。

当館のボランティア解説の原則は二つ。「間違った知識は伝えない」と「解説の仕方は各自の自由な語り口で」だ。解説が始まってからの思い出は楽しいことばかり。企画展「長谷川利行展」の勉強に鎌倉の神奈川県立近代美術館に行ったことや、谷館長の解説を聞きに、暑さのなか新潟までバス旅行したことなどなど。

最後に、活動を開始してから数年後にボランティアの一人が話した言葉を伝えておきたい。

「解説ボランティアをして良かったと思えることは旅行が楽しくなったこと。地方の美術館で、宇都宮美術館が所蔵する画家の別の作品に出会った時には、遠い親戚か友達に会ったような気持ちになります。そしてその作品をどんな風に解説しようかと考えると、画家に対する理解が深まり、豊かな気持ちになります」と。この活動を立ち上げて本当に良かったと思える一言である。



平成11年(1999年)、1期生が本格始動したころ。青木学芸員(後列左端)、鈴木学芸員(後列右端)と一緒に。

Training programs

作品解説倶楽部の研修

1. 随時行われる研修

担当学芸員によるコレクション展の展示解説

宇都宮美術館のコレクション展は、年に3回展示替えが行われ、会期のはじめに担当学芸員による展示内容の説明が作品解説倶楽部に向けて行われます。この説明をもとにして、作品解説倶楽部メンバーそれぞれが作家・作品について調べ、どんなギャラリートークにするかを考えます。

他館との交流会

作品解説倶楽部では他館の解説ボランティアとの交流会を行うことがあります。作品解説倶楽部が他館を訪れることも、他館から宇都宮美術館に来ていただくこともあります。



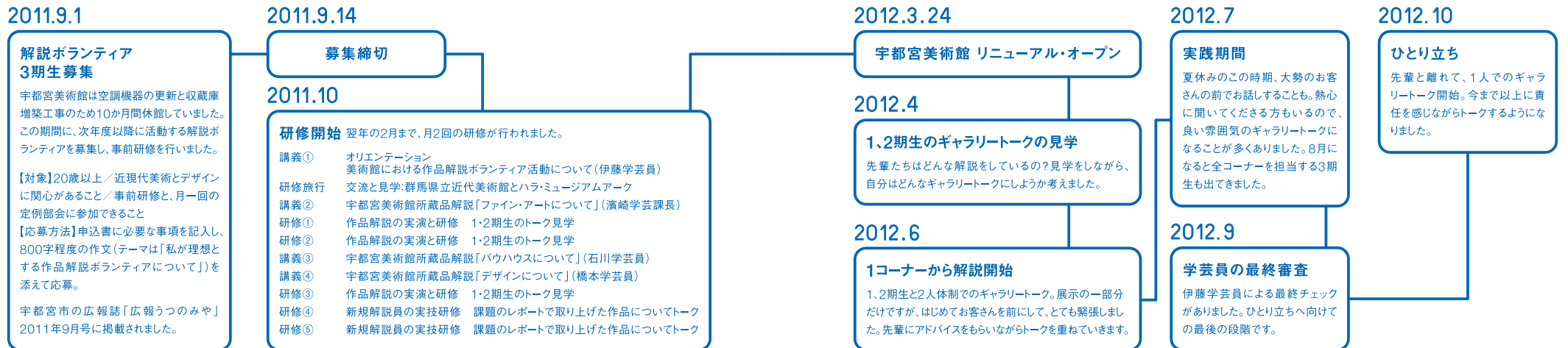
伊藤学芸員による解説



'11年 群馬県立近代美術館にて

2. 養成講座からデビューまで—3期生の研修

2011年募集、作品解説倶楽部3期生の、デビューまでの記録です。



作品解説倶楽部3期生の方々に、インタビューしました。

3期生の声

まず、作品解説倶楽部に応募したきっかけを教えてください。

—もともと美術が好きでしたし、仕事をリタイアして時間ができていたので。

—昔は美術部で絵を描いていました。たまたま「広報うつのみや」で募集があることを知り、応募しました。

ギャラリートークで心がけていることや、大切にしていることはありますか?

—一方的に話さないようにしています。最初は暗記したことをそのまま話そうとしていたので、一方的な話になりがちでした。今はお客さんの反応を見て、会話をしたり、もっと作品を見たいのかなと思ったら間をとったりしています。

—作品の良いところばかりを伝えるトークにしたいと思っています。ちょっと関係ないかもしれませんが、研修中に学芸員さんがどんな人のどんな時でも褒めてくれるから、気持ちよくトークできました。そんなことを私もしたいと思うのかもしれない。

ギャラリートークで、難しいと感じたり、苦手に思った

りすることがあれば教えてください。

—じっくり鑑賞したい方や、かいつまんだ解説が聞きたい方など、様々なお客さんがいます。お客さんの様子を見て、どんなトークをしてもらいたい人なのかを把握するのが難しいです。

—私は宇都宮の出身ではないので、知識が乏しいこともあり、宇都宮ゆかりの美術の解説は少し苦手です。でも作家さんと交流のあった方や、詳しい方がギャラリートークにいらっしょとお話を聞くことができるので、知識は深められているかもしれません。

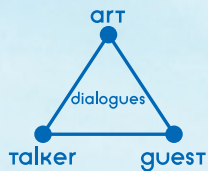
最後の質問です。ギャラリートークをしていて、楽しいと思う瞬間はどんなときですか?

—お客さんと作品について言葉のキャッチボールができた瞬間ですね。なかなか対話式の解説は難しいのですが、たまに作品の印象などを一对一で語り合えたと思うときがあり、そんなとき喜びを感じます。

—トークが終わってから、「ありがとう、楽しかった」とお客さんに言われると、私自身も楽しいトークだったと実感します。お礼を言ってもらえた時は本当にうれしいし、やりがいを感じますね。

ダイアローグ [dialogue]…対話、問答。

ギャラリートークには、三方向の対話があります。まずトーカーが美術作品を理解する、作品との対話。つぎにギャラリートークにおける、トーカーとお客さんとの対話。そして、ギャラリートークをきっかけに、お客さんが作品と対話する——人と美術のかけはしになりたいと、わたしたちは願っています。



Copyright Credits

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo,
2013 E0323 p.4, p.15-3

© Sandro Chia/VAGA, New York &
JASPAR, Tokyo, 2013 E0323 p.8

© VG BILD-KUNST, Bonn & JASPAR,
Tokyo, 2013 E0323 p.17-1

© PICTORIGHT, Amsterdam & JASPAR,
Tokyo, 2013 E0323 p.17-2

宇都宮美術館 作品解説倶楽部
鑑賞ガイド&活動の記録 1997-2013
美術をめぐるダイアローグ

企画: 伊藤伸子
小堀修司
田澤梓 (宇都宮美術館)

2013年3月発行

編集: 作品解説倶楽部
宇都宮美術館

デザイン: 氏デザイン

写真撮影 [建築]: 本多康司

印刷: 株式会社 山田写真製版所

発行: 宇都宮美術館

栃木県宇都宮市長岡町1077

©2013 宇都宮美術館